一日中魔獣に犯され絶頂しまくり
～処女を捧げ淫乱に成長する私の契約～

月影ルナは下級魔族だった。

黒髪のロングヘアを肩にかけ、控えめな胸と細い腰を持つ控えめな少女。魔力の乏しい家系に生まれ、幼い頃から「一流魔族にならなければ一族が滅ぶ」という重い宿命を背負っていた。

家系の魔力は代々枯渇しており、ついに昨日、家系の中心である**魔力の貯蔵庫**が限界を迎えた。古い封印が緩み、貯蔵されていた純粋魔力が急速に漏れ出し、一族全体の命脈が危うくなっていた。
ルナは一晩中悩み、朝を迎えるとすぐに魔導医の元へ駆け込んだ。

魔導医は厳しい顔で告げた。
「貯蔵庫を再充填するには、大量の純粋魔力が必要だ。通常の方法では間に合わない…ただ一つ、極めて強力な方法がある。

性的絶頂を通じて発生する純粋魔力を、上位魔獣と交わることで爆発的に増幅・蓄積する方法だ。今日一日、限界まで交わり続けろ。それ以外に道はない」

ルナは顔を真っ赤にし、声を震わせた。
「え…？ そんな…エッチで魔力が上がるなんて、初めて聞きました…絶対に嫌です！ 淫らすぎる…」
魔導医は冷たく言い放った。
「知らなかったか。魔族の本質的な成長法の一つだ。拒否すれば貯蔵庫は枯渇し、一族は滅ぶ。お前が選べ」

ルナは涙を堪え、震える足で古い森の奥深くにあるヴェルドの魔導の館へと向かった。

ヴェルドは本物の**上位魔獣**だった。
漆黒の毛皮に覆われた逞しい獣の体躯、鋭く尖った角、銀色に輝く獣の瞳、口元から覗く長い牙、指先には黒く鋭い爪、背中からは力強い尾が生えている。冷徹で野性に満ちた圧倒的な魔獣の姿そのものだった。

医者からの伝言を受け取っていたヴェルドは、低く獣のような唸りを上げて笑った。
「ようやく来たか。月影の娘よ。医者から聞いた通り、今日一日だけ『成長契約』を結ぶ。一日中、俺の獣の肉棒で限界まで犯し続け、純粋魔力を爆発的に得て貯蔵庫を再充填する。拒否は許さん」

ルナは震える声で抗議した。
「そんな…エッチで魔力が上がるなんて信じられません…私、まだ誰とも…処女なのに…魔獣みたいなことをさせるなんて…」
ヴェルドは牙を剥き出し、低く唸るように笑った。
「時間がない。貯蔵庫の魔力が尽きるまで残りわずかだ。契約を結べ。一族を見殺しにする気か？」

ルナは涙を浮かべ、拳を握りしめた。貯蔵庫が輝きを失っていく光景と、一族の未来が脳裏に浮かぶ。

「…わかりました。契約します。でも、今日一日だけ…絶対にそれで終わりにしてください…」
ヴェルドは魔力の契約書を空中に展開させ、ルナの指に灼熱の刻印を押した。
これで「一日の成長契約」が成立した。今日一日、ルナの身体はヴェルドの強力な魔獣魔力に極限まで敏感に反応し、絶頂するたびに純粋魔力が爆発的に蓄積される体質となった。

契約成立と同時に、ルナは魔導の館の奥にある荘厳な大寝室の巨大な天蓋付きベッドに押し倒された。白いワンピースを乱暴に剥ぎ取られ、魔力の鎖で手首と足首を広げて固定される。
「やっ…！ もう始まるんですか…？ 触らないで、見ないでください…っ！ こんな淫らな方法なんて…」

ルナは両手で胸と秘部を必死に隠そうとしたが、無駄だった。ヴェルドは冷たい笑みを浮かべ、黒い爪の生えた手でルナの小さ

な乳房を鷲掴みにした。ねっとりと長い舌で乳首を舐め回し、鋭い牙が軽く肌に触れる感触にルナは全身を震わせた。
「んあっ…！ やだ、そこ…変な感じがする…熱い…こんなことで本当に魔力が…？」

さらに太い指が太ももを這い上がり、処女の秘部に到達。優しく窄まりをほぐしながら、熱く獣じみた魔力を直接流し込んだ。ルナの身体がビクビクと激しく痙攣し、透明な愛液が指の間から溢れ出す。
「ほら、すでにこんなに濡れている。貴様の淫らな肉穴が俺の魔獣魔力を欲しがっている証拠だ」

ヴェルドの太く硬くなった肉棒——魔獣特有の隆起と熱を持ち、獣の猛々しさそのもの——が、ルナの入り口にぐっと押し当てられた。
「いやぁぁっ…！ 入っちゃダメ…契約だから仕方なく…っ！ 優しくして…魔獣みたいに荒々しくしないで…」